

# 第二回国際優生学会議

小 野 直 子

富山大学人文学部紀要第56号抜刷

2012年2月

## 第二回国際優生学会議

小野直子

### はじめに

チャールズ・ロバート・ダーウィン (Charles Robert Darwin) が『種の起源 (*On the Origin of Species*)』を刊行し、進化論を発表したのは1859年のことである。生物学としての進化論は、間もなく多くの科学者が認めるところとなった。そして1869年に、ダーウィンの従兄弟フランシス・ゴルトン (Francis Galton) が『遺伝的天才 (*Hereditary Genius*)』の中で、人の才能がほぼ遺伝によって受け継がれるものであると主張した。さらにゴルトンは1883年の『人間能力の研究 (*Inquiries into Human Faculty*)』の中で、初めて「優生学」という言葉を提唱した。彼がその言葉で意味したのは、「優良」血統に対し「劣等」血統よりも速やかに繁殖する機会を与えることによって、人類を改良する「科学」であった。1900年にグレゴール・ヨハン・メンデル (Gregor Johann Mendel) の遺伝法則が再発見されたのを機に優生学の評価は急速に高まり、世界的な拡大傾向を見せた。

優生学の成立とアメリカへの伝播を推し進めた要因として、米本昌平は以下の三点の生物学の進展を挙げている。第一は、フライブルク大学教授フリードリッヒ・レオポルト・アウグスト・ヴァイスマン (Friedrich Leopold August Weismann) の学説である。ダーウィンの進化論は、未知の遺伝理論を前提としていたので、進化論が受容されていくにつれて昔からの大問題である遺伝理論に科学者の関心が向かっていった。様々な遺伝理論が提唱された中で大きな影響力を持ったのが、1892年に出されたヴァイスマンの『生殖質説—ひとつの遺伝理論—』であった。その説によると、体細胞一般と生殖細胞とは全く別物で、生殖細胞のみが全原基 (形態発生のもとになる微小で不可視の原因) を受け継ぐ。この説はジャン＝バティスト・ピエール・アントワーヌ・ド・モネ (Jean-Baptiste Pierre Antoine de Monet)、シュヴァリエ・ド・ラマルク (Chevalier de Lamarck) の獲得形質遺伝を全否定するものであり、これを人間に重ねると、環境改善や教育の効果は著しく小さいことを意味していた。この本は1894年に英訳が刊行され、アメリカでも多くの読者を獲得した。第二は、ゴルトン達の研究である。ゴルトンは、遺伝形質の次世代の出現は統計学的な分布法則に従うと信じていたため、人間についても生物と同様に大量の測定を敢行し、厳格な統計学的処理を行った。彼は、人間の身長や胸囲が正規分布を示すことを確認して強い印象を受け、人間の精神能力もこのような分布を示すであろうと考えた。それはカール・ピアソン (Karl Pearson) に受け継がれ、数学的に洗練されていった。第三が、1900年のメンデル説の再発見である。メンデルの法則は分割も増幅もできない遺伝単

位を前提にしており、それは原基の考え方を単純化したものと読むことができた。再発見された当座は、メンデル学説は雑種第一代以降の形質の出現頻度を予測しうる数学的現象法則と考えられ、ヴァイスマン学説の正しさを証明するものと見なされた。こうして遺伝単位による遺伝現象の理解という態度は飛躍的に広がっていき、19世紀から20世紀への転換期には、すべての形質は生殖細胞に由来するという人間観が漠然と広がった。それは、生活環境の改善や教育の効果を否定する主張でもあった<sup>1</sup>。

20世紀初頭に優生学は多くの国々に拡大し、1912年には第一回国際優生学会議（International Congress of Eugenics）がロンドンで開催された。第二回は1921年にニューヨークで、第三回は1932年にまたニューヨークで開催された。これらの国際優生学会議についてはこれまで、優生学の歴史の中で簡単に触れられてきたただけであった。そこで本稿では特に1921年の第二回国際優生学会議に焦点を当てて、当時の国際的な優生学の拡大状況とその社会的意義を考察する。第一次世界大戦が始まるまでは明らかにイギリスが優生学研究の中心であったが、第一次世界大戦後優生学研究の主導権はアメリカへと移り、第二回国際優生学会議が開催される頃までには、優生学は世界的な運動になっていた。

第一回国際優生学会議では、役員・委員会委員・代表団の人数は324人、主な後援機関はイギリス優生教育協会（Eugenics Education Society）とロンドン大学ゴルトン研究所、出版された学術論文は42本、出展者は18人で出品数は263点であった。第二回国際優生学会議では、役員・委員会委員・代表団の人数は312人、主な後援機関はカーネギー研究所（Carnegie Institution for Science）の優生記録局（Eugenics Record Office）、アメリカ自然史博物館（American Museum of Natural History）、優生学研究協会（Eugenics Research Association）で、出版された学術論文は108本、出展者は131人でそれぞれ1～50点の展示品を出展した。会議と展示と出版にかかった経費は、13,016.49ドルであった。そして第三回国際優生学会議では、役員・委員会委員・代表団の人数は73人、出版された学術論文は65本、展示数は267点でそれぞれ1ないし多数の品から成っていた。会議、展示、出版にかかった経費は、6,716.96ドルであった<sup>2</sup>。このように、数字の上では第二回会議が国際優生学会議の最盛期であったとすることができる。そこで本稿では、第二回国際優生学会議の意図は何であったのか、そこで何が議論されたのかを明らかにし、その意義について考察する。

## 1. 優生学の拡大

イギリスでは、ゴルトンと彼の統計学的方法を継承したピアソンが、1901年に『バイオメトリカ（*Biometrika*）』という専門雑誌を発刊し、生物測定学を中心とする優生学を発展させた。それとは別に、1907年に優生教育協会が設立された。それは、優生学を分かりやすく説くことを目的としていた。

アメリカでは、1903年に家畜や作物の品種改良を目的として創設されたアメリカ育種家協会 (American Breeders' Association) が、1906年に協会内に優生学委員会 (Committee on Eugenics) を設置した。優生学委員会の委員には、アメリカ自然史博物館の館長ヘンリー・フェアフィールド・オズボーン (Henry Fairfield Osborn)、ベストセラーの大学教科書『応用優生学 (*Applied Eugenics*)』(1918年)の共著者ロズウェル・ジョンソン (Roswell Johnson)、植物育種家ルーサー・バーバンク (Luther Burbank)、世界的に有名な発明家アレクサンダー・グラハム・ベル (Alexander Graham Bell)、スタンフォード大学の学長デイヴィッド・スター・ジョーダン (David Starr Jordan)、及び同大学昆虫学教授ヴァーノン・マイマン・ライマン・ケロッグ (Vernon Myman Lyman Kellogg) が含まれていた<sup>3</sup>。優生学委員会は1915年に、アメリカ遺伝学協会 (American Genetics Association) に改名した。

また1904年にワシントンDCのカーネギー研究所は、ニューヨーク州コールドスプリングハーバーに実験進化研究所 (Station for Experimental Evolution) を設置した。1910年にはその附属施設として優生記録局が設置され、家系調査、遺伝の研究、これらに従事する人々の育成、結婚相談、研究成果の出版などが目指された。1916年から機関誌『優生学ニュース (*Eugenical News*)』が発行され、この分野の中心的役割を果たすようになった。

1918年には、ニューヨーク市でゴルトン協会 (Galton Society) が設立された。優生学の父ゴルトンにちなんで名付けられたその協会は、当初から人間の質の人種的差異に関心を持っていた。すでに公認されていたオズボーン、アメリカ優生学運動の指導者チャールズ・ベネディクト・ダヴェンポート (Charles Benedict Davenport)、『偉大な人種の消滅 (*The Passing of the Great Race*)』(1916年)の著者マディソン・グラント (Madison Grant) に加わったのは、プリンストン大学の生物学者エドウィン・グラント・コンクリン (Edwin Grant Conklin)、イエール大学の地理学者エルズワース・ハンチントン (Ellsworth Huntington)、カーネギー研究所長ジョン・C・メリアム (John C. Merriam)、コロンビア大学の動物学者ウィリアム・キング・グレゴリー (William King Gregory)、J・Howard・マクレガー (J. Howard MacGregor)、コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジの心理学者エドワード・リー・ソーンダイク (Edward Lee Thorndike) であった<sup>4</sup>。

1921年の第一回国際優生学会議で設置された暫定的広告委員会 (Ad Interim Committee) は、1922年にアメリカ合衆国優生学委員会 (Eugenics Committee of the United States of America)、1923年にアメリカ合衆国優生学協会 (Eugenics Society of the United States of America) になり、1925年に最終的にアメリカ優生学協会 (American Eugenics Society) になった。協会の政策と組織運営の決定を委ねられた諮問委員会には、前述のグレゴリー、ジョーダン、ケロッグ、メリアム、オズボーン、ソーンダイク、そして『アメリカ人の知能に関する研究 (*A Study of American Intelligent*)』(1923年)の著者カール・キャンベル・ブリガム (Carl Campbell

Brigham) 博士, ヴァインランド訓練学校 (Vineland Training School) の研究委員長で『カリカク家－知的障害の遺伝に関する研究－ (The Kallikak Family: A Study in the Heredity of Feeble-Mindedness)』(1912年)の著者であるヘンリー・ハーバート・ゴダード (Henry Herbert Goddard) 博士, 『良い生まれ－優生学入門－ (Being Well-Born: An Introduction to Eugenics)』(1916年)の著者マイケル・F・ガイヤー (Michael F. Guyer) 教授, 北カリフォルニア優生学連盟 (Northern California Eugenics League) の連盟長 C・M・ゲーテ (C. M. Goethe), 1924年移民制限法の共同提案者アルバート・ジョンソン (Albert Johnson), 『応用優生学 (Applied Eugenics)』(1918年)の著者ポール・ポペノー (Paul Popenoe), 『白人優越主義に対する有色人種の台頭 (The Rising Tide of Color Against White Supremacy)』(1920年)の著者ラスロップ・ストダード (Lathrop Stoddard), スタンフォード大学心理学教授で知能検査運動の指導者ルイス・マディソン・ターマン (Lewis Madison Terman), アメリカ心理学会 (American Psychological Association) 会長でハーヴァード大学教育学教授ロバート・M・ヤーキス (Robert M. Yerkes) が含まれていた。アメリカ優生学協会は学校に焦点を当てて, 学校の履修課程の一部に優生学を組み込もうとした。それに加えて協会は, 一般紙, 講演, 展示, 書物, パンフレットを含む様々な手段で優生学的事実に関する教育を大衆に広めようとした<sup>5</sup>。

優生学の重要な国際会議が初めて開かれる下地となったのは, 1911年にドレスデンで開催された「国際優生展示会」の会期中に行われた人種衛生学者の会議であった。1907年に結成され, ドイツの人種衛生学者がほぼ排他的に牛耳っていた「国際人種衛生学協会」が計画したこの会議で, ドイツ, オランダ, チェコスロヴァキア, イギリス, オーストリア, スウェーデン, デンマーク, そしてアメリカの優生学者達が顔を合わせた。会議の目的は, 国際的な関係を深め, 成長過程にある新しい科学の研究成果を公開することであった<sup>6</sup>。

1912年の第一回国際優生学会議は, ドレスデンの会議より規模も大きく, 7月24日から30日までロンドン大学で開催された。会議には多くの国々から優生主義者が集まり, 各国における純粋科学と応用科学の発達について議論し, 将来の優生学研究と実践努力の方向性を示した。第一回国際優生学会議は, 遠く離れた国々の人々が意見を交換する機会を与えたことに加えて, 社会全般に優生学に対する広い関心をもたらした<sup>7</sup>。

会議は四つの分科会に分かれていた。第一分科会では遺伝の問題が扱われ, 主に遺伝の身体的側面と異種交配問題について論じ合った。第二分科会では, 優生学が社会科学と歴史の研究に及ぼす影響について集中的な討議が行われた。第三分科会は, 優生学が法律の制定とその実施に及ぼす影響を扱った。第四分科会では, 隔離と断種という手段を用いて「不適者」の生殖を阻止する方法と, 優生学的な理想を普及させることによって「適者」の生殖を奨励する方法が議論された。出版された論文数は, スペイン1本, イタリア8本, デンマーク1本, アメリカ9本, イギリス5本, フランス6本, ベルギー1本, ノルウェー1本, ドイツ1本であった。

これらの論文は、乳幼児死亡率、犯罪、身体形態における人種的差異、混血児の虚弱さ、婚姻法、アルコール中毒によって引き起こされる遺伝的障害、性病、「不適者」に対する強制断種などを取り扱っていた。よく取り上げられた話題は、工業国における家族規模の急激な縮小とそれが「人種の自殺」につながるという懸念であった<sup>8</sup>。

## 2. 第二回国際優生学会議

第一回国際優生学会議で任命された常設国際優生学委員会（Permanent International Eugenics Committee）の第一回委員会が1913年にパリで開催され、第二回委員会は1914年8月にベルギーで開催される予定であったが、第一次世界大戦によって頓挫した。1915年に第二回国際優生学会議がアメリカで開催されることになっていたが、第一次世界大戦のためにこの計画は実行されなかった。1919年10月に再び委員会が開催され、1920年から21年に当初の予定通りアメリカで第二回国際優生学会議を開催することで合意した。1920年時点での委員会の構成国は、アメリカ、ベルギー、イギリス、オーストラリア、デンマーク、フランス、イタリア、ノルウェー、スウェーデンであった<sup>9</sup>。

第二回国際優生学会議は、1921年9月22日から28日にニューヨークのアメリカ自然史博物館で開催され、館長のオズボーンが議長になった。参加者には、遺伝学者、生物学者、統計学者、人類学者、そして各国の優生学協会の代表者などが含まれていた。コロンビア大学滞在中に会議に出席した高山潔によれば、1912年の第一回国際優生学会議には、日本からは京都帝国大学代表者として朝永三十郎が出席した。しかし今回は、日本からは一人の代表者も出席せず、日本人は高山と、当時カーネギー研究所で性の分化の起源問題を研究していた箕浦忠愛の二人のみであった<sup>10</sup>。

議長のオズボーンは「歓迎の挨拶」の中で、1921年の国際優生学会議と展示の政治的意義を明らかにした。「世界史上、人種の特質と改善に関する国際会議が現在ほど重要な時はないと思う。世界大戦期の両陣営における愛国的な自己犠牲で、ヨーロッパは何世紀にもわたる文明の遺産の多くを失い、それは決して取り戻すことができない。ヨーロッパの一部では社会の最悪要素が優勢になり、最善要素が破壊される恐れがある」。そして、世界各国で人種改良は異なる様相を呈していると指摘した。スカンディナヴィア諸国では北方人種の精神的、知的、道徳的、身体的価値が新たに評価されており、移住によって激減させてはならないという警告が出されているが、北方人種の約半分はアメリカに住んでいるとして、アメリカについては次のように述べた。「アメリカでは徐々に、教育や環境が人種的価値を根本的に変えることはない」と我々は自覚するようになってきている。我々は、揺るぎない政府の義務と責任を共有するのに不適者の入国を防ぐことによって、歴史的な共和制を維持しようと努力してきた。すべての人間は平等な権利と義務を持って生まれるというアメリカ民主主義の真の精神は、すべての



人間は平等な人格と自分自身及び他者を管理する能力を持って生まれるという政治的詭弁、及び教育と環境が遺伝的障害を相殺するという教育的詭弁と混同されてきた」（強調原文）<sup>11</sup>。

オズボーンの見解は、「精神的、知的、道徳的、身体的価値」が優れている北方人種と、「歴史的な共和制」を脅かすそれ以外のヨーロッパ人種を区別し、共和国市民と北方人種の特権の関連性を想定していた。そして、白人間の平等に基づく民主主義は困難であると述べていた。なぜなら、教育や環境では人種的価値は変えることはできないからである。従ってこの会議の目的は、次のように説明された。「この会議の建設的精神は、このような人類の小分類〔地中海人種、アルプス人種、北方人種〕の各々の美德と価値、及び白色人種、モンゴロイド、黒色人種として知られる大分類の必要性を理解することである。これらの人種が不変で原初の特徴を確固として保持する理由は、これまでに発見された最も安定した物質形態は生殖質であり、遺伝はそれに左右されるからである」<sup>12</sup>。

そしてオズボーンは、「共和制の基礎を築く」北方人種であるニューイングランド人の血統の存続を脅かす個人主義を批判した。「19世紀末から20世紀初頭には、芸術や文学だけでなく社会制度においても、過激な個人主義と呼ばれるものが見られた。家族の存続を脅かす個人主義である……。ニューイングランドでは、一世紀の間に多子家族から一人子家族に移行した。純血ニューイングランド人は、自分自身の子供を持っていない。次の段階は、子供のいない結婚とこの国の共和制の基礎を築く血統の絶滅である」。オズボーンはこの会議の精神を、このように混乱し荒廃した社会を回復させることであると結論付けた。「私は、楽観主義者とは事実を直視するが決してそれに失望しない人であると考えている。科学における楽観主義者とは、混乱し荒廃した社会を回復させるために本質を徹底的に調べ直す人である。これが、優生学の創始者フランシス・ゴルトンの建設的精神であった。私はそれが、この会議の基本であると信じている。遺伝の最悪と最善を知ること、最善を保護し選択すること、これらが人間社会の将来の発展において最も重要なことである」<sup>13</sup>。オズボーンにとって、北方人種を保護することが社会の発展をもたらすことは、自明の理であった。

会議は四部門に分かれていた。第一部門は「人間と比較遺伝学」についての問題を取り扱い、動植物における純粋遺伝学の研究と人間の遺伝の研究の成果を示した。第二部門は「優生学と家族」に関してで、人間の家族に影響を与える因子、そのような因子の制御、家系の繁殖力との関係、そのような繁殖力の社会的・法的管理の問題を検討した。また、優生学的に優良家系と劣等家系の死亡率の差異と、戦争・流行病・風土病などの特殊要因による死亡率に対する影響も検討した。第三部門は「人種的差異」で、人種的差異、政治的境界や国境によってしばしば作り出される不自然な集団と人種的特徴に関心を寄せていた。第四部門は「優生学と国家」で、優生学研究の実際の応用に関する研究と、そのような発見の道徳、教育、歴史、様々な社会問題や社会運動への有用性を取り上げていた。会議の目的は、「革新的変化を奨励することではなく、男女に優生学

的基準を応用することによってもたらされる良い結果を明らかにするように、純粋優生学及び応用優生学のあらゆる話題を公平にそして冷静に議論することであった。なぜなら「人間は長い間、動植物の種の改善にそれらを応用することを学んできた」からである<sup>14</sup>。

会議で発表された学術論文は、『優生学、遺伝学、家族 (*Eugenics, Genetics, and the Family*)』、『人種と国家における優生学 (*Eugenics in Race and State*)』の二冊本にまとめられた。論文は合計 108 本で、アメリカ 77 本、イギリス 13 本、フランス 4 本、イタリア 4 本、チェコスロヴァキア 3 本、ノルウェー 2 本、そしてスコットランド、チュニジア、メキシコ、キューバ、インドが各 1 本であった。論文の約半分は染色体、突然変異、性決定などの基礎遺伝学に関するものであり、発表者の多くは優生学的社会政策には関心を持っていなかった。残りは優生学の論文で内容は多岐にわたっており、近親交配、人種混淆、成功した家族あるいは退化した家族の家系史、才能の遺伝、未成年者の家出、人口問題、教育問題、戦争の影響、各国の優生学の紹介などであった (表 1, 表 2)<sup>15</sup>。

優生学の論文の多くは、遺伝力と人種の退化への恐怖に焦点を当てていた。例えばマサチューセッツ工科大学のフレデリック・アダムズ・ウッズ (Frederick Adams Woods) は、不平等社会の必然性について語り、民主主義的社会秩序形成を期待することは無駄であると結論付けた。「どれほど平等と民主主義を生み出す環境的影響力に期待しても、おそらくは雑多な配偶者選択、遺伝、受け継がれる財産の可能性の蓄積によって、現実的な結果は反対の方向、すなわち階級分化と円錐化 [ある社会集団が高い地位にのぼって他が低い地位にとどまるという過程が著しく進行して円錐形が形成されること] に向かっているという結論は避け難いように思われる」<sup>16</sup>。

人種改良財団 (Human Betterment Foundation) のウィルヘルミン・E・ケイ (Wilhelmine E. Key) は、「最新の分析では、国家の力の基礎は生物学である。……我々はますます、国家の力の要因は人々の遺伝的特質と性向にあるという見解を受け入れるようになっていく」と遺伝の国家への影響を認めていた。しかし他方で、「国民としての保全を弱体化させるように現在作用している反優生学的影響力を是正する手段」として、「中産階級」において大家族を築くことを可能にする簡素な生活水準への回帰、人口のあらゆる階級において優生学的良心を育成する教育運動、独身主義や断種ではなく婚姻と望ましい遺伝的可能性を有する家族の形成の促進、個人の強化とは対照的な奉仕の概念、早く結婚して親になることを可能にする十分な経済的調整、を挙げた<sup>17</sup>。

生まれ (遺伝) と育ち (教育や環境) のいずれが重要であるかという問題は議論的であり、アレイン・アイルランド (Alleyn Ireland) は結論を出すことを、議会に要求しようとした。「人々が主に祖先がそうであったが故にそうであるのか、それとも主に同時代人が彼らに対してそうしたが故にそうであるのかを疑問の余地なく知るまで、我々は 1 ドルの価値の少年に 1,000 ド



ルの価値の教育を強制しようとしているのかどうか、我々の移民法がアメリカ人の血統に致命的な墮落をもたらしているのかどうか、あるいはすでにもたらしたのか、我々の刑法が病院を満たすべきなのに刑務所を満たしているのかどうか、すべての人々による政府がいつかは、年間総額数十億ドルに達する国や州や地方自治体の収入を公共善に賢明な支出をするという希望に根拠があるのかどうかは分からない。従って私は、遺伝と環境の問題の現状に関して調査・報告し、我々の知識に関する現在の格差を埋めるために必要な方法を提案し、世界中の全教育機関にその問題に関する科学的情報を宣伝する計画を策定するための委員会を任命する計画を、議会に推奨する」(強調原文)<sup>18</sup>。

そのような委員会が任命されたかどうか記録は示していないが、この第二回国際優生学会議を機に結成されたアメリカ優生学協会は、育ちよりも生まれを重視していた。以上のように、第二回国際優生学会議では、純粋な基礎科学としての遺伝学への関心と、遺伝に基づく生物学的優劣の存在を前提とした優生学的社会政策への関心が、複雑に混在していた。20世紀の最初の20年間にアメリカの優生学は、家畜の全般的改善から人間の計画的繁殖へとその関心を狭め、人類を改善するための遺伝的管理に着目するようになったのである<sup>19</sup>。

### 3. 展示会

第二回国際優生学会議の開催に伴って、優生学の研究及びその実際的应用に関する展示会が9月22日から10月22日までアメリカ自然史博物館で開かれた。出展者は131名で、写真、家系図、人口動態統計の図表、動植物や人間の遺伝の法則を示す資料、動画、人種の変遷を示す地図や表、人体測定装置、精神測定装置、優生学や遺伝学的要因に関する本などが展示された<sup>20</sup>。入場料は無料で、公式には記録されていないが、展示公開中5,000人から10,000人が展示を訪れ、そのうち821人が「優生学研究に対する特別な関心と、連邦議会と展示の目的を推進したいという願望」を示す登録簿に署名したと、展示委員会委員長ハリー・H・ラフリン(Harry H. Laughlin)は述べている。また優生記録局からの出席者や案内者が、絶えず展示の解説役を務めた<sup>21</sup>。展示は、「普通の知性を持ち教育を受けていれば、特別な科学的訓練は受けていなくても容易に理解し評価することができる」ようなものであった。それは、「遺伝」「人間の家族」「人種の要因」「応用優生学」「特別な制度と方法」の五部門に分かれていた<sup>22</sup>。

美術史家メアリー・K・コフェイ(Mary K. Coffey)は、1921年の第二回国際優生学会議から1932年の第三回国際優生学会議までの間、アメリカ自然史博物館に展示されていた「平均的なアメリカ人男性(The Average American Male)」という彫像について分析している。ジェーン・ダヴェンポート・ハリス(Jane Davenport Harris)によって制作されたその彫像は、第一次世界大戦中のアメリカ陸軍新兵から収集された身体測定値を、石膏で体現していた。そのような身体計測研究は19世紀末から、様々な犯罪者や専門家、そして人種的「型」を分析するた

めに優生主義者達によって用いられ、時には写真を利用して視覚的に整備されてきた。彫像はここからさらにもう一步踏み込んで、「平均的な型」を三次元化した。コフェイは、1921年から1932年の間に「平均的アメリカ人男性」像の解釈が変化したことを示している。最初に展示された時、「平均的アメリカ人男性」像は「ハーヴァードの運動選手 (Harvard Athlete)」という彫像と対になっており、その対照は、北方人種の退化がそれ程進化していない白人種との混淆によって引き起こされることを示していた。しかしながら、移民制限法通過から8年後の1932年には、「平均的アメリカ人男性」像は、平均的アメリカ人男性が出生率の差によって退化する兆候と解された。コフェイは、優生主義者が国家の遺伝的衰退の主要原因として少数の子供しか生まない白人中産階級の教育を受けた女性に目を向けるようになるにつれて、彫像の解釈も変化したと主張している<sup>23</sup>。

コフェイによれば、ダヴェンポートの「平均的アメリカ人男性」像は、移民によってアメリカの人種が劣化しているという優生主義者の警告に対する反論の余地のない視覚的証明として機能した。「ハーヴァードの運動選手」像の力強い理想化された身体と対照的な、平均的男性の細い肩、膨らんだ腹、引き締まった筋肉組織の欠如は、先のことを考えずに劣等なヨーロッパ人種と混淆した結果、(白人の)アメリカ人の身体が退化していることを意味していた。1921年の展示の見学者にとって、「ハーヴァードの運動選手」像は、優生主義者が移民政策によって「有色人種の増加」から保護したいと望んでいる「アメリカ人」の象徴としてのアングロ・サクソンを示していた。「先天的な特質及び人種と家族の運命に特に関心を持っている人々」は、白人優越という前提を損なうことなく、「平均的なアメリカ人」像を自分達と比較しながらハーヴァードの運動選手の理想に憧れることができた<sup>24</sup>。

1921年に優生主義者が感じていた人種の退化に対する明白な切迫感は、移民政策に影響を与え、優生学を正当化した。特に展示は、優生学を大衆化し、アメリカの人種を将来的に保護するためには優生学的政策が必要であるということを、立法者に納得させる責任を負っていた。従って、議員と「先天的な特質及び人種と家族の運命に特に関心を持っている人々」に、特別招待状が送られた<sup>25</sup>。無制限の移民の影響に対する優生主義者の懸念は、「迫り来る『メイフラワー号』の子孫の消滅」「移民とアメリカ生まれの増加によるアメリカの人口増加」「様々な国からのアメリカへの移民」「移民の結婚と出生率」と題された図表に明らかであった。どのようにして身体と精神の計測を行うのか、あるいはどのように遺伝の法則が決定されるのかを家系図で説明している展示は、優生学の方法を観客に普及するのに役立った。その中でも抜きん出ているのは、統計とその視覚化、写真であった。「優良」家系や「劣等」家系を追跡する家系図に加えて、有名大学の学生や医師、鉄道馬車の車掌、数学者、全米科学アカデミーのメンバーなどの写真もあった。これらの写真は、優生記録局によって提出され、同じ階級や専門職の人々の「著しい類似」を示していると主張された<sup>26</sup>。これらの例は、人間の外観と想像上

の先天的な才能や素質が関係しているという優生学的推定において、写真が証拠と作用していることを示している。

白人と黒人の胎児を比較している展示では、人種的差異の原因を身体計測に委ねていた。カーネギー研究所の発生学者A・H・シュルツ（A. H. Schultz）博士によって準備された展示は、人間の出生前の発育段階における人種的差異を取り扱っていた。それは子宮内発育中の9週間から14週間の、455人の白人と168人の黒人の胎児を分析し、その差異を以下のように列挙していた。「すべての週の胎児において、白人よりも黒人の方が上腕・前腕指標が大きく、それは黒人の胎児が上腕と比較して前腕が長いことを示している。同様に、黒人の胎児は大腿部と比較して脚部が長く、それは成長するにつれてはっきりしてくる。脚と同様手も、白人の胎児の方が少し短くて幅が広い。白人においては、多くの場合第二指と第四指は同じ長さで、しばしば第二指の方が第四指より長い。しかし、黒人におけるこれらの指の長さの関係は、非常に多くの場合第四指の方が長く、第二指より短いことはない。他の指と比較した親指の長さは黒人の方が短い、その差異は変わることなく子宮内発育中目立っている。黒人の胎児よりも白人の方が多くの場合第一足指が長い、第二足指は多くの場合黒人の方が長い。黒人は白人よりもかかとが高い。胴体には人種的差異は見られない。頭部については、黒人の胎児において脳の部分が比例して小さく、顔の部分が比例して大きい。すべての発育段階において、黒人の胎児の方が鼻は比較的短くて幅が広く、両人種の鼻指数に著しい差異をもたらしている。妊娠後期には、黒人の鼻孔は横方向、白人の鼻孔は矢状方向に向かう。唇は黒人の胎児の方がずっと厚い」<sup>27</sup>。おそらく優生主義者にとって最も重要であったのは、脳部分の大きさの人種的差異であった。胎児の脳の大きさに関わらず、19世紀から人間の頭蓋の比較計測はしばしば、人種差別的・性差別的態度と結び付いていたからである。

以上のように、国際優生学会議における展示は、アメリカ生まれの血統を保護するためには何らかの優生学的政策が必要であるということを、議員や一般大衆に納得させる役割を担っていた。図表によって統計を視覚化し、家系図や写真を使用することによって、優生主義者は自分達の主張が反論の余地のない経験的事実であることを証明しようとした。展示は、移民とアメリカ生まれの人口増加率の差異を比較し、「優良」家系と「劣等」家系が遺伝的に決定されていることを示し、移民や黒人、貧困者などを「不適者」として分類していた。その明確な政策的含意は、選択的繁殖計画の余地があるということであった。

## おわりに

1930年までには、国際的な優生学運動の推進役として、アメリカとドイツがイギリスをはるかにしのぐ力を持つようになっていた。しかしながら他方でアメリカでは、かつて優生学を支援していた生物学者のレイモンド・パール（Raymond Pearl）や動物学者のハーバート・ス

ペンサー・ジェニングズ (Herbert Spencer Jennings), 遺伝学者のハーマン・ジョゼフ・ミュラー (Herman Joseph Muller) といった人物達が優生学運動の重鎮を批判するようになり、優生学組織との関係を絶った<sup>28</sup>。1932年にニューヨークの自然史博物館で開催された第三回国際優生学会議では、主催者達は基礎遺伝学の論文を取り上げないということを決めた。というのは、遺伝学者達は、やはり1932年にニューヨーク州イサカで予定されていた第七回国際遺伝学会議 (International Congress of Genetics) に招待されていたからである。この第三回国際優生学会議の議長はコールドスプリングハーバー研究所 (Cold Spring Harbor Laboratory) のダヴェンポートで、会議は身体計測、人種混淆、社会と優生学、積極的・消極的優生学、病気と不妊、差別的繁殖力、人類遺伝学などの部門から成っていた。大多数の論文はアメリカ人によるものであったが、その他の発表者はイギリス、フランス、ドイツ、オランダ、ソ連、イタリア、ハンガリー、ポーランド、キューバ、ノルウェー、デンマーク、インド、カナダからであった<sup>29</sup>。1921年の第二回国際優生学会議の時には優生学と遺伝学は混在していたが、1930年頃までには優生学と遺伝学は分離しつつあった。

第二回国際優生学会議が開催された時、優生主義者達は、「劣等な」ユーロッパ移民の流入と、彼らとアメリカ生まれの人々の出生率の差異によって、「優良な」北方人種系アメリカ人の血統が劣化することに対する切迫した脅威を感じていた。彼らにとっては北方人種の血統こそが共和国の基礎であり、彼らを保護することが将来の社会の発展をもたらすのであった。生まれか育ちかという問題は論争的であったが、優生主義者にとっては、人種の価値は遺伝によって決定されていて教育や環境では変えることができないので、白人間の平等に基づく民主主義は困難であるように思われた。従って、アメリカ生まれの血統を保護するためには、何らかの対策を講じることが急務であった。

国際優生学会議で「専門家」がそのような問題について議論する一方で、優生学的研究及びその実際の応用についての知識を一般大衆や政策決定者に広めるための展示会が開催された。一般大衆や政策決定者を納得させるために、優生主義者は図表や写真を利用して情報を視覚化し、自分達の主張が反論の余地のない経験的事実であることを証明しようとした。そこに含意されていたのは、人間には遺伝的に決定された優劣が存在し、それは教育や環境によっては変えることができないこと、その優劣は外見に反映されること、そして当時アメリカは人種の劣化の脅威にさらされていたが、遺伝の法則を理解し管理することによって人類を改善することができることなどであった。このように、優生主義者にとって第二回国際優生学会議は、当時の「混乱し荒廃した社会を回復させる」ことを目指したものであり、それは移民制限や断種などの具体的政策に反映された。その際に優生主義者が重要な役割を演じたことは、1920年頃には優生学の専門「科学」としての威信と影響力が、政策決定にまで及んでいたことを示している。

注

- 1 米本昌平・松原洋子・櫛島次郎・市野川容孝『優生学と人間社会－生命科学の世紀はどこへ向かうのか－』講談社現代新書, 2000年, 18-21頁。
- 2 Harry H. Laughlin, “Historical Background of the Third International Congress of Eugenics,” in *A Decade of Progress in Eugenics: Scientific Papers of the Third International Congress of Eugenics Held at American Museum of Natural History, New York, August 21-23, 1932* (Baltimore: William and Wilkins, 1934), 13-14.
- 3 Steven Selden, *Inheriting Shame: The Story of Eugenics and Racism in America* (New York and London: Teachers College, Columbia University, 1999), 4-5.
- 4 Ibid, 13.
- 5 Ibid, 22-23.
- 6 シュテファン・キュール (麻生九美訳)『ナチ・コネクション－アメリカの優生学とナチ優生運動－』(明石書店, 1999年), 38頁。
- 7 Laughlin, “Historical Background of the Third International Congress of Eugenics,” 1-2.
- 8 Elof Axel Carlson, *The Unfit: A History of a Bad Idea* (Cold Spring Harbor, New York: Cold Spring Harbor Laboratory Press, 2001), 269-71.
- 9 “Committees on the Second International Eugenics Congress,” *Eugenical News* 5 (1920), 13-14.
- 10 高山潔「第二回萬國優生學會儀傍聴の記」『児童教育』16 (1922年), 96頁。
- 11 Henry Fairfield Osborn, “Address of Welcome,” in *Eugenics, Genetics and the Family: Scientific Papers of the Second International Congress of Eugenics Held at American Museum of Natural History, New York, September 22-28, 1921*, vol. 1 (Baltimore: Williams and Wilkins, 1923), 1-2.
- 12 Ibid., 2.
- 13 Ibid., 3-4
- 14 Laughlin, “Historical Background of the Third International Congress of Eugenics,” 3-4.
- 15 *Eugenics, Genetics and the Family; Eugenics in Race and State: Scientific Papers of the Second International Congress of Eugenics Held at American Museum of Natural History, New York, September 22-28, 1921*, vol.2 (Baltimore: Williams & Wilkins, 1923).
- 16 Frederick Adams Woods, “The Conification of Social Groups: Evidence from New England Families,” in *Eugenics, Genetics and the Family*, 321.
- 17 Wilhelmine E. Key, “Heritable Factors in Human Fitness and Their Social Control,” in *Eugenics, Genetics and the Family*, 405, 410-11.
- 18 Alleyne Ireland, “The Nature-Nurture Issue in Its Bearing on Government,” in *Eugenics in Race and State*, 426.
- 19 Selden, *Inheriting Shame*, 20.
- 20 “The Exhibit of the Second International Congress of Eugenics,” *Eugenical News* 6 (1921), 66.
- 21 Harry H. Laughlin, *The Second International Exhibition of Eugenics Held September 22 to October 22, 1921, in Connection with the Second International Congress of Eugenics in the American Museum of Natural History, New York: An Account of the Organization of the Exhibition, the Classification of the Exhibits, the List of Exhibitors, and a Catalog and Description of the Exhibits* (Baltimore: Williams & Wilkins, 1923), 20.
- 22 Laughlin, “Historical Background of the Third International Congress of Eugenics,” 4.
- 23 Mary K. Coffey, “The American Adonis: A Natural History of the ‘Average American’ (Man), 1921-32,” in *Popular Eugenics: National Efficiency and American Mass Culture in the 1930s*, eds., Susan Currell and Christian Cogdell (Athens: Ohio University Press, 2006): 185-216.
- 24 Ibid., 198.
- 25 Laughlin, *The Second International Exhibition of Eugenics*, 20.
- 26 Coffey, “The American Adonis,” 197-98.
- 27 “Fig.24, Comparison of White and Negro Fetuses,” in *The Second International Exhibition of Eugenics*, 108.
- 28 キュール『ナチ・コネクション』, 50-51頁。
- 29 Carlson, *The Unfit*, 271.

【表 1】第二回国際優生学会議学術論文第一巻『優生学・遺伝学・家族』

	氏名	所属	国	論文題名
1	Dr. Henry Fairfield Osborn	American Museum of Natural History	アメリカ	歓迎の挨拶
2	Leonard Darwin	Eugenics Education Society	イギリス	優生社会の目的と方法
3	Dr. Charles Benedict Davenport	Carnegie Institution of Washington	アメリカ	優生学研究
4	Dr. L. Cuénot	University of Nancy	フランス	遺伝と適応
5	Dr. H. S. Jennings	Johns Hopkins University	アメリカ	単細胞生物における遺伝
6	Dr. C. E. McClung	University of Pennsylvania	アメリカ	染色体複合体の進化
7	Dr. Calvin B. Bridges	Columbia University	アメリカ	染色体物質の異常
8	Dr. A. F. Blakeslee	Carnegie Institution of Washington	アメリカ	チョウセンアサガオの変異
9	John Belling	Carnegie Institution of Washington	アメリカ	相同染色体間の誘引
10	Dr. George H. Shull	Princeton University	アメリカ	マツヨイグサ属問題解決における致死因子との関連
11	Dr. R. Ruggles Gates	University of London	イギリス	植物における新しい変異の型
12	Dr. P. W. Whiting	Iowa Child Welfare Research Station, State University of Iowa	アメリカ	半数性単為生殖の遺伝的差異の分析
13	Dr. H. J. Muller	University of Texas	アメリカ	突然変異
14	Dr. Charles Zeleny	University of Illinois	アメリカ	復帰突然変異
15	R. A. Fisher, M.A.	Rothemsted Experimental Station	イギリス	突然変異によるダーウィンの進化
16	Dr. C. H. Danforth	Washington University School of Medicine	アメリカ	人間における突然変異の頻度と遺伝体質の発生
17	Dr. Louis Legrand		チュニジア	遺伝のメカニズムの簡単な説明
18	Dr. A. Franklin Shull	University of Michigan	アメリカ	ワムシにおける性決定
19	Dr. Arthur M. Banta and L. A. Brown	Carnegie Institution of Washington	アメリカ	枝角類の性支配に関するデータ
20	Dr. Halsey J. Bagg	Huntington Fund for Cancer Research, Memorial Hospital, and Department of Anatomy, Cornell University Medical College	アメリカ	ラジウム放射能による哺乳類の発育障害
21	Dr. E. Carleton MacDowell	Station for Experimental Evolution	アメリカ	シロネズミのアルコール依存症治療の遺伝的意味
22	Henry A. Cotton, M.D.	New Jersey State Hospital	アメリカ	精神障害の遺伝
23	Dr. R. J. Terry and Dr. Lee D. Cady	Washington University School of Medicine	アメリカ	正常心理と異常心理の集団における類上突起発生の比較
24	Dr. Paul A. Lewis	Henry Phipps Institute of the University of Pennsylvania	アメリカ	結核と遺伝の関係
25	Dr. Leo Loeb	Department of Comparative Pathology of Washington University	アメリカ	ネズミにおける癌の遺伝
26	Dr. C. C. Little	Carnegie Institution of Washington	アメリカ	人間における癌体質の遺伝
27	Dr. Lucien Howe		アメリカ	視覚障害の遺伝
28	R. A. Fisher, M.A.	Rothemsted Experimental Station	イギリス	双生児の発生に関する新データ
29	Kristine Bonnevie	Institute of Genetics	ノルウェー	24,518人の「指紋」の統計的検討の主要結果



30	C. C. Hurst		イギリス	雌鳥の繁殖力の遺伝
31	Dr. A. Myerson		アメリカ	精神疾患の遺伝
32	Dr. Aaron J. Rosanoff	Kings Park State Hospital	アメリカ	精神障害の遺伝
33	Dr. Carl E. Seashore	Division of Anthropology and Psychology, National Research Council	アメリカ	音楽的才能の個人的及び人種的遺伝
34	Hazel M. Stanton	State University of Iowa	アメリカ	音楽的遺伝の実験的調査
35	Dr. M. Lucien March	La Société française d'Eugénique	フランス	フランスにおける戦争の結果と出生率
36	Dr. Sewall Wright	Bureau of Animal Industry, U.S. Department of Agriculture	アメリカ	モルモットにおける近親交配の結果
37	Dr. Helen Dean King	Wister Institute of Anatomy and Biology	アメリカ	近親交配は有害か
38	Ruth Moxcey Martin		アメリカ	ニューイングランドの三つの古いコミュニティにおける血族結婚
39	Dr. Herbert J. Spinden	Peabody Museum of Harvard University	アメリカ	人間社会における近親交配の南米の例
40	W. S. Anderson	University of Kentucky	アメリカ	山間部遠隔地における生殖質の影響
41	M. Etienne Rabaud		フランス	同一カップルにおける連続出産に関する発達比較研究
42	Dr. Howard J. Banker	Eugenics Record Office	アメリカ	理想的な家族歴
43	Dr. Frederick Adams Woods	Massachusetts Institute of Technology	アメリカ	社会集団の漸減－ニューイングランドの家族による証拠－
44	Sarah Louise Kimball	California Geneological Society	アメリカ	メイフラワー号の移住者
45	Dr. Howard J. Banker	Eugenics Record Office	アメリカ	教養ある鍛冶屋－優生学的類型－
46	Dr. J. Joaquin Izquierdo, M.S.A.		メキシコ	イスキエルド一族の家系の概要
47	Dr. Hilda Herrick Noyes and George Wallingford Noyes		アメリカ	オネイダ・コミュニティにおける優良種繁殖の実験
48	Dr. Amos W. Butler	Indiana Board of State Charities	アメリカ	反社会的条件の要因としての家族
49	E. L. Lidbetter		イギリス	貧困家系
50	Dr. Arthur H. Estabrook	Eugenics Record Office	アメリカ	イシュマエル一族
51	Dr. Wilhelmine E. Key	Race Betterment Foundation	アメリカ	人間の適応の遺伝要因とその社会統制
52	Elizabeth Greene	Waverly House	アメリカ	150人の若者の家出人の研究
53	Dr. Roswell H. Johnson	University of Puttsburgh	アメリカ	配偶者選択

[出典] *Eugenics, Genetics and the Family: Scientific Papers of the Second International Congress of Eugenics*, vol.1 (Baltimore: Williams & Wilkins, 1923).

【表2】第二回国際優生学会議学術論文第二巻『人種と国家における優生学』

	氏名	所属	国	論文題名
1	Dr. G. V. de Lapouge		フランス	人間の混淆における人種
2	Dr. R. Bennett Bean	Anatomical Laboratory, University of Virginia	アメリカ	人間の身体に関する覚書
3	Dr. Bird T. Baldwin	Iowa Child Welfare Research Station, University of Iowa	アメリカ	子供の身体発育の科学的予測
4	Dr. V. Giuffrida -Ruggeri	University of Naples	イタリア	50年前のイタリア人青年の体格 の身長・体重指数
5	Fabio Frassetto	Anthropological Institute, University of Bologna	イタリア	体格の身長・体重指数ないし頑 強性
6	Fabio Frassetto	Anthropological Institute, University of Bologna	イタリア	成人の身長と体重の関係を支配 する法則のその他の形態
7	Dr. Jon Alfred Mjøen	Winderen Laboratorium	ノルウェー	調和的・不調和的な異種交配
8	William McDougall	Harvard University	アメリカ	優生学的手段としての報酬の新 計画のための国家基金
9	Dr. E. A. Hooton	Harvard University	アメリカ	ある身体的特徴に対する人種混 合の影響に関する観察結果と疑 問
10	E. M. Vicari	Carnegie Institution of Washington	アメリカ	雑種形成と行動
11	Dr. Louis I. Doblin	Statistician, Metropolitan Life Insurance Company	アメリカ	外国人の死亡率ーアメリカの口 の人種的要素の活力に関する 定量分析への貢献ー
12	Dr. Frederick L. Hoffman	Statistician, Prudential Insurance Company of America	アメリカ	ハワイにおける人種混合
13	Dr. L. C. Dunn	Connecticut Agricultural Experiment Station	アメリカ	ハワイにおける人種混合の結果
14	Dr. Maurice Fishberg		アメリカ	ユダヤ教徒とキリスト教徒の結 婚
15	Dr. Redcliffe N. Salaman		イギリス	ユダヤ人問題に関する覚書
16	Dr. Paul R. Radosavljevich	New York University	アメリカ	スラヴ民族の優生学的問題
17	W. F. Willcox	Cornell University	アメリカ	アメリカにおける黒人の分布と 増加
18	Dr. Frederick L. Hoffman	Statistician, Prudential Insurance Company of America	アメリカ	黒人と白人の混合と異人種間結 婚の問題
19	Leonard Darwin	Eugenics Education Society	イギリス	優生学的改革の分野
20	Bernard Mallet	Late Registrar-General for England	イギリス	優生学に関する登録
21	Dr. Raymond Pearl	Johns Hopkins University	アメリカ	人口問題の優生学的側面
22	Dr. E. M. East	Bussey Institution, Harvard University	アメリカ	農業に関係する人々
23	Dr. S. J. Holmes and J. C. Goff	University of California	アメリカ	様々な環境の影響下における男 児の選択的除去
24	Otto E. Koegel, D. C. L.	Associate Counsel, United States Veterans' Bureau	アメリカ	アメリカにおける内縁関係とそ の発達
25	Gopalji Ahluwalia		インド	ヒンドゥー教の結婚理念
26	Dr. Harriette M. Dilla	Department of Economics and Sociology, Smith College	アメリカ	優生学との関連で親になること の統制

27	George Adami	University of Liverpool	イギリス	本当の貴族政治
28	Dr. Harry H. Laughlin	Eugenics Record Office, Carnegie Institution of Washington	アメリカ	アメリカにおける優生学的断種の現状
29	Dr. Rudolph M. Binder	New York University	アメリカ	健康と優生学
30	Dr. S. Adolphus Knopf		アメリカ	結核問題との関連における優生学
31	C. W. Saleeby, M.D.	Royal Institution	イギリス	予防的優生学－人種の害悪からの親の保護－
32	Dr. R. A. Fisher	Rothemsted Experimental Station	イギリス	特に性的不道徳に関する文明社会における良心の発達
33	Daisy M. O. Robinson	United States Public Health Service	アメリカ	遺伝と性病
34	Dr. Horatio M. Pollock	Statistician, New York State Hospital Commission	アメリカ	精神疾患の予防要因としての優生学
35	Dr. Stewart Paton	Princeton University	アメリカ	医学の機会
36	Dr. Sante Naccarati		アメリカ	神経症の形態学的特徴
37	Dr. William S. Sadler	Chicago Therapeutic Institute	アメリカ	内分泌物, 欠陥生殖質, 遺伝的欠陥
38	Dr. M. P. E. Groszmann	National Association for the Study and Education of Exceptional Children	アメリカ	現在の理論の限界
39	Milton Fairchild	Character Education Institution	アメリカ	高等優生学における純粋科学研究
40	Dr. A. F. Tredgold, F. R. S.		スコットランド	教育を受ける能力と遺伝
41	William McDougall	Harvard University	アメリカ	天賦の才能と社会的地位の相関関係
42	Dr. Louis I. Dublin	Statistician, Metropolitan Life Insurance Company	アメリカ	女性の高等教育と人種改良
43	Dymple Bryant Johnson		アメリカ	27人の高等学校卒業生の寿命と社会的向上に関する人生の物語
44	W. C. Billings		アメリカ	移民法の医学的応用
45	Dr. Harry H. Laughlin	Eugenics Record Office, Carnegie Institution of Washington	アメリカ	施設収容者の出生
46	Dr. Arthur Wallace Calhoun		アメリカ	優生学の問題における経済的要因
47	Dr. A. B. Wolfe	University of Texas	アメリカ	優生学と社会的態度
48	Alleyn Ireland		アメリカ	遺伝環境問題と政府への影響
49	C. E. A. Bedwell	Society of Comparative Legislation	イギリス	国際情勢における優生学
50	Dr. Corrado Gini		イタリア	優生学的観点から見た戦争
51	Dr. D. F. Ramos	University of Havana	キューバ	キューバの優生学に関連する人種改良法
52	Dr. Ladislav Haskovec	Eugenics Society of Prague	チェコスロヴァキア	チェコスロヴァキア共和国における優生学運動
53	Paul Popenoe		アメリカ	優生学とイスラム
54	Vladimir Růžička	Charles University	チェコスロヴァキア	優生学における因果関係調査の重要性
55	Vladimir Růžička	Charles University	チェコスロヴァキア	優生学研究組織への動き

[出典] *Eugenics in Race and State: Scientific Papers of the Second International Congress of Eugenics*, vol.2 (Baltimore: Williams & Wilkins, 1923).